

## ■ 神奈川県立 神奈川大学 図書館

横浜 〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋 3-27-1 TEL (045)481-5661(代表)  
平塚 〒259-1293 平塚市土屋 2 9 4 6 TEL (0463)59-4111(代表)  
<http://www.kanagawa-u.ac.jp/lib/index.html>

## 書物は消滅するか

図書館長 的場 昭弘

最近亡くなったフランスの哲学者ジャック・デリダは、数年前に『パピエ・マシン』（上・下巻、ちくま学芸文庫、2005年）という書物を書いた。この書物の第一章「来るべき書物」は、書物を作っている媒体、とりわけ紙を問題にしている。図書館を示すビブリオテークのビブリオとは、本来樹皮の皮を意味している。それがやがて書物という言葉の起源になるのだが、そもそも樹皮は、書物ではない。ただのメモ書きにすぎない。

本来図書館とは、樹皮や紙といった何か書かれたものを置く場所を意味している。とすると、もともと図書館は書物の保存所ではない。書物とは、著者の考えをまとめた作品であり、たんなる紙ではない。そこには、始まりと終わりがあり、何らかの主張がある。その意味で、書物はそれ自体制約をもっている。著者の思想をとりあえずある時期にまとめたものであり、それは時代的制約を前提にしている。

一方樹皮や紙とは、著者の思想も一貫性もないメモ書きである。だからそこには、時間的制約も何もない。いわば無限の空間が広がっているともいえる。しかしそれゆえ、樹皮や紙は読者の興味をほとんどそそらない生の資料的価値しかない。いずれにしろ図書館は、こうした生の資料の保存所であったのだが、グーテンベルク革命以後ますます作品としての紙、すなわち書物を集める場所になった。

しかし、最近のデジタル化の時代は、再びビブリオ、すなわち紙の世界を復活させつつある予感がある。ウェブ上を流れる書き物は、一貫性も主張も必要としない。いつでも書き直せるという点において、すでに書物としての自己一貫性を拒

否している。もちろん図書館は今のところ、書物の形態をデジタル化したもののみを集めている。しかし、今後書物自体がデジタル化したとき、ストーリーとしての一貫性を維持できるのだろうか。たとえば、著名な思想家の書き残したメモ書きを何の脈絡もなく並べる作業など、これは書物というよりデジタルによく似合っている。そこには一貫性もなく、紙片がただ並んでいるだけである。デジタルはそのページだけを見るわけであり、脈絡など不要である。

かつて書物ができたとき、それまでの対話的手法に代わって、文章的手法が出現した。対話的手法は、面前の人にわかりやすい言葉を使ったが、文章的手法はむしろわかりにくい言葉を使った。文章言葉の長い歴史を振り返ると、意味不明であることが、むしろ作品の崇高さを表すかのような錯覚にとらわれていたのではないかと感ずるときがある。その意味で文章言葉を理解することはエリートであることの証であった。

ソクラテスはなぜ書物を書かなかったのか。多分こうした文章言葉による暴力をおそれたのだろう。机に向かうことは、民衆に背いて書くことでもある。デジタル化の時代、人々は深く考えないで書いている。それを良しと考えるか、悪しと考えるかは別として、それはまるで対話的手法である。デジタル化の時代の書物として『電車男』（新潮社、2004年）がヒットした。ブログから生まれた書物だという。今後、著者不明、内容ばらばら、タイトルもないという書物が出現するかもしれない。しかしそれを書物ではないとどうして言えるのであろうか。

(経済学部教授・社会思想史)

## 『アイデンティティ・ゲーム：存在証明の社会学』

石川准著 新評論  
B361.5-298

泉水 英計

存在証明とは、自分が価値のある人間だということを示すためにアイデンティティを操作すること。スティグマを貼られた人々は存在証明に駆り立てられる。例えば、手足の不自由な者が知力では優れようとする。しかし、莫大な労力の末に得るのは、「障害者のわりにはよくやっている」という差し引きゼロの評価が精精だろう。コストパフォーマンスが遥かに良いのが、「身体障害だけ知的障害（外国人、老人、女性など）よりましだ」というように、他人の価値を下落させることで自分の価値を相対的に上昇させる方法だ。実際にしばしば目にするが、証明が差別をうみ、被差別が証明に駆り立てるといふ明らかな悪循環だ。

このような価値の奪い合いは、獲得可能な価値が限られていることを前提とする。したがって、価値の剥奪を誰もが経験しないで済むには、社会内に配分される価値を増やす必要がある。その方法が、「他人と違っていい」と信じることで、つまり「開き直り」である。ただし、「他人と違わなくてはならない」という規範まではふくまない。この点を混同すると、支配的な価値観に対抗する価値観（例えば被差別少数者の肯定的なアイデンティティ）をせっかく立ち上げたのに、その価値観への個人の同調を強要し、この次元で価値をむしろ縮減してしまう。逸脱であった文化が開き直るとき、それは新たな規範へと転じやすく、そうならば新たな逸脱を内に生み出すからである。一般に「ちがいが」価値を生むならば、序列化される「差違」ではなく、例えば色の好みのちがいのような、優劣が無意味になるような「相異」が必要だ。また、既存の価値観の支配力に挑戦するには「やせ我慢」も必要である。美味そうなブドウを見つけたが高くて手が届かない。そこで「あれは実は不味いんだ」と自分に言い聞かせて諦めた。その後、手ごろな高さに次のブドウを見つけたらどうするか。喜んでこれを取れば、さっきの科白は単なる「負け惜しみ」。ブドウの価値を再確認してしまう。しかし、ぐっとこらえて取らずに通

り過ぎる「やせ我慢」を繰り返せば、ブドウの価値を引き下げることができるはずである。

日常生活における不便が自明である障害者にとってこの区別は重要である。身体機能の欠陥を器具などで補填することはもちろん悪いことではない。しかし、不便の解消を目的としたはずなのに、健常者の生活を理想とする永遠の（したがって無益な）努力へ横滑りしてしまうことが多い。終わりが無いのは健常者になれないからではなく、目指される「健常者」は理念であって、障害者の現実がいかに変化しようとも到達することが不可能だからである。貶められた障害と闘うのではなく、障害をおとしめる健常者文化と闘わなければならない。そのためには、社会が予期していない選択をすることである。リスクは高いが、そもそも障害者にとって無難な選択は相対的剥奪の状況にすぎない。介助者無しで映画に行くかどうかと悩んだとき、出かけなければ、事故や冷笑を避けて平穏な一日を過ごせるであろうが、それは健常者ならば楽しめた映画を楽しめないという状況でもある。しかし、あえて出かければ映画も楽しめる上に親切な人に出会うという可能性もある。自己規制し既存の秩序（障害者は家の中で大人しくしているべき）に順応しているとき、社会は自然に調和しているようにみえる。しかし、敢えて社会統制が発動される必要がないから自然にみえるだけであり、社会統制の本質はこのように低コストで効力を持続する点にある。

石川准は全盲の社会学者。エスニシティ、障害者自助組織、ヒーリングビジネスを題材に、同化、差別、対人コミュニケーション、逸脱者の政治などを論じた障害学の必読書。多文化共生を唱えることが当たり前の良識になった昨今、次の一步を真摯に考える人に強く薦めたい。自己の経験に根拠をおいた鋭い社会観察と、晴眼者の文章にありがちな、語句選択の曖昧さが無い文体が印象的。

(経営学部専任講師・コミュニケーション論)

## 『明治の音：西洋人が聴いた近代日本』

内藤高著 中公新書  
B081-1791-49 081-C 66-1791

鈴木 彰

このところ、明治にはいって日本が近代化していく過程をさまざまな立場で体験した外国人たちの著作物の刊行がとくに盛んになっている。手軽な文庫版を含めて、旅行記・見聞記・滞在記・写真集・絵画集など、それらを一々枚挙するにいとまがない。そこには、未知なる異空間「日本」が彼らの目にどのように映り、どんな関心が持たれたのかという異文化交流のかたちへの関心と、かつての日本とそこに生きていた人々がどのような姿をしていたのかという、いわば失われた時代・忘れられた日本を語り伝える証言への興味の高まりがはたらいているのだろう。そしてそれは一方で、今の日本のありかが見えにくくなっていることを、うらがえしとしてものがたっているように思われてならない。

さて、今回わたしがすすめるこの一冊は、すでに近代化した西洋諸国で生まれた人たちと、近代化の過程にあった明治日本の「音の風景」との印象的な出会いの場面をとりあげたもの。多くの場合、異文化との直接的な接触は、まず視覚的な体験——見たことのない風景や人やものの姿かたちに接する衝撃——からはじまる。そしてその直後、未体験の「音」と出会う。たとえば、人々のふだんの生活が生み出すさまざまな音、祭や儀式や音楽会といったハレの場から響く音。意味を理解できないことば・会話の声もまた、音として耳に入ってくる。そこから違和感と好奇心のうねりが生まれる。著者は、19世紀半ばから20世紀初頭にかけて来日した5人の西洋人たちの「聴覚」を、当時の日本の音風景がどのように刺激したのかを、彼らの著作からいねいに聴き取っていく。

その5人とは、まず1878年（明治11）初来日したイギリスの女性旅行家イザベラ・バード（1831～1904）と、1877年（明治10）に来日した

アメリカの動物学者エドワード・モース（1838～1925）。そして、1885年（明治18）と1900年（明治33）から翌年にかけて、主に長崎に海軍士官として滞在したフランスの作家ピエール・ロチ。ギリシャ生まれにして1890年（明治23）来日以後、生涯を日本で過ごして「耳なし芳一」などの著作を遺したラフカディオ・ハーン（小泉八雲。1850～1904）、さいごに、1921（大正10）年に外交官として日本に着任したフランスの劇作家・詩人ポール・クローデル（1868～1955）。著者は、彼らのことばから、当時の日本の音風景をあざやかに浮かび上がらせるとともに、それぞれに違う関心・感性をもってそうした異文化空間とせめぎあったり、共鳴したりする彼らの姿を見だし、わかりやすく説明している。その導きによって、読者は明治日本に起きた、今日にまで影響を及ぼす重大な変化のひとつに気づかされることだろう。

著者内藤高さんは、現在大阪大学大学院教授。パリ留学から一時帰国したときに周囲の音から「湿り気のあるタオルでも耳に当てられたような感じ」をうけ、それがこうした問題について考えるきっかけになったという（「あとがき」参照）。音は聴く人のそれまでのあらゆる体験と深く関わり、かつての記憶を呼び覚まし、今の感情にはたらきかける。たとえひとつの同じ音でも、ひとりひとりにとってきこえ方・意味は異なる。本書はそうしたことがらに気づかせてくれる。

わたしたちはふだん多くの音につつまれて生きている。その音を聴きわける感性の余裕をどれだけでも持っているだろうか。日常空間を少し自覚的にみつめることから今を考えていくという魅力に満ちた一冊。一読をおすすめる。

（外国語学部助教授・日本文学）

## ディキンズ『竹取の翁の物語』初版 1888年

Dickins, Frederick Victor

The Old Bamboo-Hewer's Story (Taketori no Okina no Monogatari): the Earliest of the Japanese Romances, written in the Tenth Century / translated, with observations and notes, by F. Victor Dickins. London: Trubner, 1888.

118p., 3 folded leaves of plates: ill.; 23cm. Japanese text (Romanized) and English translation of: 竹取物語

“With three chromo-lithographic illustrations taken from Japanese.

Full brown cloth.

この数年間、本学図書館では、1863年来日した、イギリス人の軍医フレデリック・V・ディキンズ (Frederick Victor Dickins, 1838-1915) の著作をセレクションしてきた。『百人一首』 Hyakunin is'shu, or Stanzas by a Century of Poets, Being Japanese Lyrical Odes. London: Smith Elder, 1866. 『忠臣蔵』 Chushingura; or the Loyal League: a Japanese Romance. New York: G.P. Putnum's Sons, 1886. 『飛騨の匠の物語』 The Story of a Hida Craftman (Hida no Takumi Monogatari). London: Gowan & Gay, 1912. 他などである。

ディキンズについては、秋山勇造『日本学者フレデリック・V・ディキンズ』(御茶の水書房・2000年)の先駆的な研究があって、それによって、ディキンズが駐日公使ハリー・パークス (Sir Harry Smith Parkes, 1828-1885) の下で働いていたアーネスト・サトウ (Sir Ernest Mason Satow, 1828-1929) と生涯の交友を続けたこと、そして上記の日本の古典を優れた翻訳(後述するように、これには南方熊楠の協力があつた)で幕末以降に欧米に紹介した日本学者であること、そして1866年に一時帰国し、1871年に法廷弁護士として再来日した彼が、横浜で起きたマリア・ルーズ号事件(1872年、明治5年、7月13日に、ペルー国籍のマリア・ルーズ号がマカオから本国に帰港する際に暴風のために横浜に入港した。その夜半に、大部分が広東出身の中国人だった230人の労働者の一人が逃げて船内での虐待を英国代理公使ワトソン (R.G. Watson) に助けを求めたことがこの事件の発端。

日本側の副島種臣外務卿は、中国人全員を帰国させたためにペルー側が提訴し、明治8年にロシア皇帝の仲裁裁判で日本政府の立場が認められた事件)でもペルー側法廷弁護士として活躍したという、これまで知られていなかった事実も明らかになったのである。

植物学者で民俗学者でもあつた南方熊楠(1867-1941)は、明治25年(1892)9月に英国に渡つ

てロンドンで生活し、明治33年(1900)10月に帰国するまでに大英博物館で研究活動を行っている。彼は、この間にロンドン大学事務総長であつた(1894年に就任)ディキンズと出会つた。ディキンズは、すでに英国一流の週刊科学雑誌『Nature』(1893年8月17日号)に掲載された熊楠の『The Constellations of the Far East』を読み彼に関心をもっていたから、出会いを契機に研究面や、生活面でも補助を行い、またディキンズも南方の協力を得て、在日中に行っていた<日本研究>を深化させる好機を得たのである。南方は、後にディキンズについて、「この人はパークス公使と来る前から日本に着たりおり、のちに横浜で弁護士と医師を兼業とし、かのペルー国の船が支那人を奴隷に売るべく積み来たり、日本政府より抑留されて国際裁判となりし前に、ペルー人の代理となりわが政府を訴えペルー船を弁護せしひとり。……1906年にオクスフォード大学より『日本古文』二巻(『万葉集』、『百人一首』、『竹取物語』、『芭蕉句集』などより成る)を出し、その序にサトウ、フロレンツ、プリンクリー、チャンパーレンおよび小生に礼謝の辞を述べたり」(『南方熊楠全集第九巻』(平凡社・昭和50年・77頁以下)と述懐していることから、南方とディキンズの親交についてはここからも知ることがでる。またディキンズが「金剛石と真珠の指輪」を41歳で結婚する熊楠に贈っていることから両者の交流が並々ならぬものであつたことが理解できよう。

本学図書館所蔵のディキンズ訳『竹取の翁の物語』は、ダークブラウンの全布装で、<満開の桜と青鷺>、<菖蒲と川蟬>の模様が彫られていて<春>を表現している。父 Thomas Dickins に捧げられた『本書』は、主に、「英訳篇」の本文と日本語訳がローマ字でなされた「テキスト篇」で構成されている。以下にそのひとつの事例を紹介すると、

The Coming of the Lady Kaguya and the Days of Childhood.

Formaly there lived an old man, a bamboo-hewer, who hewed bamboos on the bosky hill-side, and manywise he wrought them to serve men's, and his name was Sanugi no miyako. は、

KAGUYA HIME NO OI-TACHI

Ima wa mukashi Taketori no okina to iyeru mono arikeri. Shigeyama ni majirite take wo toritsuru, yorozu no ko to ni tsukaikeri; na wo ba Sanugi no Miyako to namu iikeru. と訳されている。

また、Kaguya Hime no oi-tachiはthe Lady Kaguya's growing-up, また Formaly と訳された Ima wa mukashiはonce upon a timeでも表現できるとも述べている。

このように、全118頁のうち、59から78頁は「日本語の文法点描」、79から90頁は「テキスト分析」、そして「語彙集 (Vocabulary)」が91~118頁にあり、この時代にこれほどの入念にそして綿密に一人の英国人によって日本の言語の科学的な分析が行われていたことに驚かざるを得ない。

(情報サービス課 吉田 隆)



## 2005年度前期情報リテラシーセミナー Web of Science 講習会開催

情報リテラシーセミナーの一環として、去る6月29日(水)にWeb of Scienceの講習会が開催されました。

Web of Scienceは、自然科学を中心に、社会科学、人文科学をカバーする学術雑誌約8,900誌を収録した引用索引データベースです。論文を書こうとしたときなどに、あまりにもたくさんの学術情報があふれていて悩んだことがあると思います。そんなときに役立つのがこのWeb of Scienceです。

この講習会は、前年に引き続いて行われたもので、昨年度はバージョンアップ情報を中心に実際の利用方法などの講習会を実施しました。今年度は二部構成で行われ、第一部では23号館203教室において「引用文献データベースで広がる神奈川大学の研究」と題し、神奈川大学における物理、電気、機械、化学分野の各研究の文献引用の事例をあげてトムソンサイエンティフィック社シニア・アナリスト宮入暢子氏による講演が行われました。第二部は場所を23号館111教室に移して、初級者向けにパソコンを使った「Web of Scienceの使い方(初級編)」を、同じくトムソンサイエンティフィック社セールスマネージャー渡辺麻子氏に実施してもらいました。

なお、講習会に先立ち、的場図書館長、西久保工学部長にご挨拶をいただき、続いてトムソンサイエンティフィック社アジアパシフィックセールスバイスプレジデントのマーク・ガーリングハウス氏にWeb of Scienceの概要についてお話しをしていただきました。

今回の講習会の参加者は、第一部、第二部それぞれ40名ほどで、熱心な質問もあり、データベースへの関心の高さが伺われました。

このほか、6月14日から7月5日にかけて、次のオンラインデータベースの利用セミナーを行いました。後期についても、セミナーを実施する予定ですので、ぜひご参加ください。内容・日程など詳細につきましては、ホームページ、掲示でお知らせいたします。



### (2005年度前期データベース利用セミナー)

- **JDream**: 科学技術分野などの文献情報データベース。
- **リーガルベース**: 法律、判例、コメントデータベース。
- **法律判例文献情報**: 法律、判例文献掲載誌紙データベース。
- **新聞記事他国内データベース**: 朝日、読売、毎日新聞など記事検索。辞書、事典データベース他。
- **EBSCOhost**: 人文、社会科学など幅広い分野の世界の学術雑誌の掲載論文(全文・抄録)データベース。
- **LEX/DBインターネット**: 判例全文データベース。
- **法律時報文献月報**: 法律、政治学文献掲載誌データベース。
- **Lexis Nexis**: アメリカの法律、判例などを中心に、ニュース、TV放送内容、ビジネス情報など全文データベース。
- **CiNii**: 学協会、紀要などの論文データベース。
- **NDL-OPAC**: 国会図書館蔵書、論文情報データベース。
- **First Search**: 世界の図書、雑誌記事の書誌、所蔵データベース。
- **eBook**: 法学関係電子図書。
- **Web of Science**: 自然科学・人文社会科学などの国際的コア・ジャーナル掲載論文の引用情報データベース。

## 2005年度 第1回 図書館上映会と講演会開催のお知らせ 五十嵐 匠 監督作品「HAZAN」

『ナンミン・ロード』（92年文化庁優秀作品賞）、『SAWADA』（96年毎日映画コンクール・文化映画部門グランプリ、キネマ旬報文化映画第1位受賞）、『地雷を踏んだらサヨウナラ』（1999年公開）他などで知られる同監督の作品シリーズ第5回目です。

上映作品は、『HAZAN』。この作品は、岡倉天心らの薫陶を受け、陶芸家として初の文化勲章を受賞した「板谷波山」の作陶と、それを支えた人間たちの物語です。2004年度ブルガリア・ヴァルナ第12回国際映画祭グランプリGOLDEN APHRODITE賞・ブルガリア映画製作者連盟賞W受賞作品。今回は、これを記念しての再上映です。

講演は、五十嵐匠監督による『映画の力／地方の力 - 映画「HAZAN」から「長州ファイブ」へ - 』です。多数のご参加を期待します。参加希望者は、2F カウンターまたは図書館情報サービス課（045-481-5661 内線：2320・2325）までお申し込み下さい。（参加費は無料）

- 日 時：7月21日（木）
- 場 所：図書館視聴覚小ホール
- 上映時間：15：00～17：00
- 講演時間：17：10～18：00

## 2005年度 第1回図書館講演会「著書を語る」

### 横浜図書館と平塚図書室で開催

図書館の新しい試みとして、本学教員に自著について講演をしていただく「著書を語る」を、横浜図書館と平塚図書室で相次いで開催しました。

第1回目として横浜図書館では、6月10日（金）に的場昭弘経済学部教授により『マルクスだったらこう考える』を題材にして講演会が行われました。6月27日（月）には平塚キャンパスにおいて、理学部の平井通宏特任教授の著書『ビジネスパーソンのための英語超効率勉強方』を取り上げ、先生にお話をいただきました。

的場先生は、マルクス研究者として活躍されていますが、本書は専門書ではなく、もしマルクスが現在に甦ったら、この社会をどう見るかという一風変わった視点で書かれています。先生のお話も、マルクス研究にたずさわるきっかけから始めて、マルクス主義が現在どう評価されているか、また、マルクスが生活費を稼ぐためにアメリカの新聞社にエンゲルスを通じて記事を送っていたというエピソードなどを交えて、肩のこらない内容でした。

一方、平塚図書室では、サブタイトル「英語の達人が教える最強の英語学習とは一を中心テーマに、第1部「英語に関する見方を整理しよう」、第2部「スキル別英語勉強法」、第3部「英語学習の周辺」の3部構成でお話しをしていただきました。「初学者、例えばTOEIC500点までは、語彙、文法がまだ多少弱いので、多読で固めることが大事」など、講師は独断と偏見の学習方法というが、TOEIC990点（満点）クリアなど英語に関する資格36冠王というこの分野における第一人者が自ら努力して確立した英語学習のノウハウを惜しげもなく公開してくださり、アンケート調査からも参加者の高い満足度がうかがわれる講演となりました。

図書館では今後、この講演会「著書を語る」を継続して開催していく予定です。開催要領につきましては、ホームページ、掲示でお知らせしますので、ぜひ足をお運びください。

## ■図書館展示コーナー特別展示

# 『旧制横浜専門学校－戦時下の学生－』

展示場所：横浜図書館1階展示コーナー  
展示期間：2005年7月6日～10月28日  
企画・展示：神奈川大学資料編纂室

### 戦後60年

当時、六角橋のキャンパスには神奈川大学の前身、横浜専門学校があり、多くの学生が学んでいました。卒業生12,223人を輩出した横浜専門学校の歴史は、そのほとんどが戦時下にあります。特別展示『戦時下の学生』は、戦後60年の節目をむかえて、その歴史を振り返るものです。

特別展示では、今日、神奈川大学のキャンパスで学ぶ学生と同じ世代の「戦時下の学生」の日常と、彼らが学園から戦場へ、軍需工場へと動員されていった戦時体制を証言する資料を展示します。

昭和のはじめの混乱した時代に中正堅実な青年の育成こそ必要とする米田吉盛によって設立された横浜専門学校は、全国から集まった学生たちのエネルギーで満ち溢れていました。当時の様子は学生新聞『横専学報』で知ることができます。論説、報道、文芸、スポーツなど紙面は充実し、その内容は横浜専門学校だけではなく当時の社会情勢を伝える貴重な資料でもあります。

さて、当時の世相は決して明るいものではありません。世界恐慌や東北、北海道の冷害発生は農村危機を深刻化させ、満州事変や2.26事件などを起こす伏線となります。このような情勢下で学生たちの生活も徐々に変化していきます。

軍事教練の一部として行われた野外演習では、突撃訓練や夜間演習などが実戦さながらに行われ、学生たちは否応なく戦時体制に組み込まれていきます。富士山麓での野外演習の様子は「野外演習計画表」(展示)からも見えます。(写真は富士山麓での野外演習のひとつコマ)



戦争の拡大は戦時動員体制を一層強化、横浜専門学校では文部省の指示により「横浜専門学校報国隊」(組織図・展示)を編成し、戦時動員体制

が確立します。

これ以降、学校教育は勤労動員に置き換えられ、ますます強化されます。1944(昭和19)年に通年動員が決定されると、学生たちは「動員先一覧」(展示)に見られる日本鋼管や東芝通信などに動員されることが日常になりました。さらに翌年の「決戦教育措置要綱」により1年間の授業停止が指令されると、動員先での出張授業も困難になり、横浜専門学校の教育機関としての機能はほぼ停止状態になります。

一方、学生に対する徴兵猶予の適用は1943(昭和18)年9月に理工系学生や20歳未満の学生など一部を除き停止、学業半ばにして戦場に向かうことになりました。正確な記録は残っていませんが、横浜専門学校生の多くが学徒出陣しました。また、繰上げ卒業により出征した卒業生も多かったのです。(写真は出征する学生への書き)



しかし、多くの犠牲者を出しながらも戦局はますます悪化します。1945(昭和20)年4月4日夜、横浜上空に現れた米軍機は横浜市内を爆撃、横浜専門学校では、竣工したばかりの工科校舎や武道場が炎上、教職員、学生の懸命な消火活動にもかかわらず全焼しました。

敗戦後\*、校舎は占領軍に接収されます。仮校舎の大倉山精神文化研究所と県立二中(現、翠嵐高校)で授業を再開したのは10月15日のことです。暫くすると復員した学生や帰省先から戻った学生などで仮校舎は溢れました。

\* 8.15開催の教授会で米田は「文部省ヨリ何分ノ指令アルマデハ一応現状ニ於テ生徒ノ動揺防止ニツトムルコト 尚動員先工場ニ対シテハ責任教授明日中ニ参向挨拶置カレタシ」と指示した。

## 平塚キャンパス図書室 前期試験前の2週間にわたり休日開館を実施

来たる7月22日(金)より前期試験が開始されますが、これに伴い平塚図書室では、かねてより検討を重ねてまいりました休日開館を、今回下記のとおり、試験前の2週間試験的に実施します。

### 記

- ① 7月10日(日) 9:10開館～16:50閉館
- ② 7月17日(日) 9:10開館～16:50閉館
- ③ 7月18日(月) 9:10開館～16:50閉館

なお、当日売店は休業しておりますので、昼食は各自でご用意ください。

## 図書館の利用案内

### 1. 夏季休業中の休館・休室期間の変更について

夏季休業中の館内整備休館期間・室内整備休室期間を次のとおり変更します。

8月10日(水)から8月14日(日)を

8月11日(木)から8月16日(火)に変更

なお、横浜図書館、平塚図書室の開館時間・休館日は次のとおりです。

#### 横浜図書館

開館時間：9時30分～18時

休館日：日曜・祝日・館内整備日

#### 平塚図書室

開室時間：9時10分～16時50分

休室日：土曜・日曜・祝日・室内整備日

### 2. 夏季長期貸出について

貸出期間：7月15日(金)～9月12日(月)

返却期限：9月26日(月)

### 3. 高校生一日図書館員体験コース実施について

8月22日から8月26日かけて「高校生一日図書館員体験コース」を実施します。これは高校生に図書館業務を通じて、情報の収集や加工、労働の尊さなどを学んでもらうもので、本年度で4回目になります。

### 4. 県内高校生への図書館公開について

夏季休業中、神奈川県内の高校生に図書館を

公開します。利用方法などは次のとおりです。

利用方法：高校の身分証明書を図書館入口受付に提示し、1階カウンターで登録手続きをしてください。

利用範囲：閲覧室の利用、所蔵資料の館内閲覧。

利用日時：横浜図書館 9:30～18:00

7月30日(土)～9月17日(土)

平塚図書室 9:10～16:50

8月1日(月)～8月31日(水)

### 書架から

作家島尾敏雄の死後19年して、代表作『死の棘』のもととなる『「死の棘」

日記』(新潮社、2005年3月)が公開された。『死の棘』は、夫の「情事」を知った妻ミホの衝撃、動揺、発作、入院などの受難の日々を、自らを断罪するようにつづることで、夫婦の極限的關係を描いた小説である。彼女は、日記の最終ゲラを出版社に送ったとき、若々しい姿の夫と再会し、「ミホ、ご苦労様」といわれたような気がする。インタビューで語っている。そんな濃密な關係は、さまざまな場面ですでにあまりにも遠くなってしまっていないだろうか。図書館には、日記の他に『島尾敏雄全集』全17巻(晶文社、1980-1983)も所蔵されている。(K)